

## 歴史散策

# 東海道桑名宿を訪ねる

【日 時】 平成26年2月8日（土） 9:00～12:30

【散策コース】 全行程 約 4.5km (WC)印はトイレあり

近鉄益生駅（集合・受付）

① 矢田立場 → ② 本願寺 → ③ 天武天皇社 → ④ 長圓寺 (WC)  
→ ⑤ 寿量寺 → ⑥ 十念寺 (WC) → ⑦ 光徳寺  
→ ⑧ 歴史を語る公園 → ⑨ 春日神社 (WC) → ⑩ 七里の渡し跡  
→ ⑪ 海蔵寺 → ⑫ 北桑名神社 → ⑬ 堤原道標・常夜燈  
サンファーレ市民広場（解散）

【案内人】 1班 加藤 重樹 さん（桑名歴史案内人の会）  
2班 神谷 裕 さん（ ” ）  
3班 西村 一彦 さん（ ” ）  
4班 山下 博子 さん（ ” ）

主催：三重県  
後援：桑名市 桑名市教育委員会  
協力：桑名歴史案内人の会

### 事務局

三重県桑名地域防災総合事務所  
歴史散策係（地域防災課） TEL：0594-24-3821

東海道は、古代より都と東国を結ぶ街道であり、同時に律令制度における国郡制度上の行政区画である五畿七道（東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海）の一つとして、鈴鹿関以東の沿岸地域を指す言葉でもあった。

鎌倉時代には、鎌倉と京都を結ぶ最も重要な幹線道路となり、このころには、街道沿いに専門の宿屋を主体とした宿と呼ばれる集落が現れていたと言われる。そののち、天下を掌握した徳川家康により中山道・甲州街道（甲州道中）・日光街道（日光道中）・奥州街道（奥州道中）とともに五街道の一つとして一里塚や宿場、伝馬制度が整備された。これらは、江戸の品川宿を第一の宿とし、京都の天津宿まで五十三の宿場がもうけられたことから、俗に東海道五十三次と呼ばれる。

東海道の総延長は、江戸日本橋から京都三条大橋間の約 125 里（約 500 キロメートル）。昔の旅人は、朝の 4 時頃に宿を立ち、夕方 6 時頃まで歩いて、500 キロメートルの道のりを 12～15 日で歩いたという。一日平均では約十里（39 キロメートル）。現代人に比べてずいぶんと健脚だが、これは、宿賃が高いためゆっくり旅をしていたのでは、旅費がかさんでしまうからだという。

三重県内を通る東海道は約 45 キロメートル。尾張宮宿から海上七里を渡って、東海道 42 番目の宿・桑名宿にはいり、四日市宿、石薬師宿、庄野宿、亀山宿、関宿、坂下宿を経て天下の難所であった鈴鹿峠へと向かう。

今回は、桑名の矢田立場から東海道桑名宿の中心を散策します。

### ① 矢田立場

慶長町割当時は城下外の矢田村であったが、東海道に面して次第に家並が続き、旅人の休息する茶店が多く、矢田町になった。国道 1 号線に分断され、東西に分かれるが、東矢田町では戦災でほぼ全焼。西矢田町は戦災を免がれ、連子格子の家も見られ、街道の面影を残している。竹内家には馬をつないだ輪が道路に面して残されている。



### ② 本願寺

御影山と号す。西山浄土宗。当寺の由来は不詳であるが、江戸時代は本願寺村があり、古くからの巨刹であったと思われる。戦災で建物は焼失。現在は住職も居らず荒廃している。

境内に「梅花仏鏡塔」がある。鏡塔は俳人各務支考の分骨墓である。享保 16 年（1731）支考が美濃北野村（現岐阜市）で亡くなった時に、支考の墓に参詣しやすいように、東海道筋の本願寺に分骨墓を雲裡坊杉夫が建立した。雲裡坊から続く桑名の俳句結社「間遠社」の歴代社長の句碑と松尾芭蕉の句碑もある。



③ <sup>てんむてんのうしや</sup> 天武天皇社

壬申の乱(672年)に大海人皇子(のちの天武天皇)が、桑名郡家に駐泊されたことにちなみ、のちに創建された。元は新屋敷付近にあったが、江戸時代に鍋屋町に移った。戦災で建物は焼失し、のちに再建。社号標は最後の桑名藩主松平(久松)定敬の書である。社宝に「刀 銘固山備前守藤原宗次」があり、嘉永7年(1854)作。宗次は桑名藩主松平家の抱工である。



④ <sup>ちやうえんじ</sup> 長圓寺

<sup>だいひざん</sup> 大悲山と号す。浄土真宗本願寺派。元は江場村にあったが、慶長町割に際して現在地に移る。当時住職の魯縞庵義道(天保5年=1834年没)は好古癖があり、「<sup>くわなめいしよずえ</sup>久波奈名所図絵」、「<sup>そうふめいしやう</sup>桑府名勝志」などの著作がある。また、彼が考案した「桑名の千羽鶴」は一枚の紙で連続した多くの鶴を折る。戦災で焼失。のち本堂はコンクリート建で再建。墓地に大阪相撲力士千田川善太郎(文化元年=1804没)の墓がある。平成25年「魯縞庵義道顕彰碑」が境内に建立された。



⑤ <sup>じゆりやうじ</sup> 寿量寺

<sup>みやうえんざん</sup> 妙延山と号す。日蓮宗。元は今一色にあったが、慶長町割の際に現在地へ移る。江戸城の障壁画を描いた狩野光信は江戸から京都に帰る途中に、慶長13年(1608)6月4日桑名で没し、当寺に葬った。入口すぐ南側に「狩野光信墓」の小さな五輪塔がある。境内には、明治2年(1869)銘の<sup>ぶつそくせき</sup>仏足石があり、寺宝として、「銅磬」、「日蓮聖人御本尊」がある。建物は戦災で焼失。のち鉄骨木造建で本堂を再建。鐘楼と旧大黒殿が平成24年に国の登録文化財に指定された。



⑥ <sup>じゆうねんじ</sup> 十念寺

<sup>ぶつこうざんくほんいん</sup> 仏光山九品院と号す。浄土宗。元は朝明郡切畑(現三重郡菰野町)にあり。室町時代に桑名(のちの桑名城本丸の地)に移り、慶長町割の際に現在地に移る。建物は戦災で焼失したが、寺宝は残る。「<sup>さいれいすびやうぶ</sup>祭礼図屏風」(江戸初期)、「<sup>たいままだら</sup>当麻曼荼羅図」(室町初期)、「<sup>ぶつねはんず</sup>仏涅槃図」(室町時代)がある。西側道路を隔てた墓地に「<sup>もりつらあき</sup>森陳明之墓」がある。森陳明は明治維新の際に、桑名藩敗北の責任を負って切腹した。なお、当寺境内に七福神をまつり、11月23日に七福神まつりが行われる。



⑦ <sup>こうとくじ</sup>光徳寺

<sup>ちんしょうざんぎやねんいん</sup>鎮照山凝念院と号す。浄土宗、元は泡州崎念仏道場と称した。明治7年(1874)進善学校(日進小学校の前身)が当寺で始まった。明治10年に火災を受け、さらに戦災で焼失。境内墓地に萬古焼の祖である「<sup>ぬなみろうさん</sup>沼波弄山墓付沼波家墓所」や市岡宗栄(大阪市岡新田開発者、1714没)、加賀月華(陶芸家、1937没)の墓がある。また、当寺には桑名市戦没者過去帳を安置している。なお、境内のヒカンサクラは桑名市内では早く咲く桜である。また、岐阜県根尾谷から分植した<sup>うすずみざくら</sup>淡墨桜もある。



⑧ 歴史を語る公園

片町河岸跡で、城の塀に面している船着場で、食料品や日用品などの荷揚げ場所であった。そのため、青物問屋などが軒をならべていた。昭和の初期まで、名古屋や大垣行の舟が発着していた。

平成3年(1991)、東海道沿道修景事業の一つとして、「歴史を語る公園」として整備された。この公園は江戸日本橋から京都三条大橋までの東海道を模している。



⑨ <sup>かすがじんじや くわなそうじや</sup>春日神社(桑名宗社)

桑名宗社は式内桑名神社と式内中臣神社の両社からなり、古来から桑名の総鎮守である。桑名神社は桑名開発の豪族である<sup>くわなおびと</sup>桑名首の祖神である<sup>あまつひこねのみこと</sup>天津彦根命とその子<sup>こあめのくぐしびのみこと</sup>天久々斯比乃命を祀る。永仁4年(1296)に奈良から春日大明神を勧請して合祀したため「春日さん」と親しまれている。江戸時代には幕府から百石の神領寄進を受けた。文化4年(1807)建立の拝殿、天保4年(1833)建立の堂々たる楼門など全社殿は戦災で焼失。昭和29年(1954)に拝殿再建。平成7年に楼門再建。



社宝として「安南国書」、「徳川家康日課念仏」「東照神君画像」、「徳川家康座像」、「松尾芭蕉真蹟短冊」、「太刀、村正作」など多数あり、「春日神社石取祭(国指定重要無形民俗文化財)」「春日神社青銅鳥居」、「御車祭奏楽」、「御膳水井」もある。

境内には山口誓子句碑・千葉兎月句碑がある。

青銅鳥居は東海道に面して寛文7年(1667)に建立され、治工は桑名の鋳物師辻内善右衛門種次。また、鳥居脇には「志るべ石」がある。

⑩ <sup>しちり わたし あと</sup> 七里の渡し跡

慶長6年(1601)正月、江戸と京都を結ぶ東海道が制定され、桑名宿と宮宿(現名古屋市熱田区)の間は、海路7里の渡船と定められた。のち佐屋宿(現愛知県愛西市)へ川路3里の渡船も行われた。宮までの所要時間は3~4時間と思われるが、潮の干満によりコースは違っており、時間も一定できなかった。ここは伊勢国の東入口にあたるため、天明年間(1781~1789)に、「伊勢国一の鳥居」が建てられ、昭和5年以来伊勢神宮の遷宮ごとに建て替えられている。明治になって、東海道制度は廃止となったが、揖斐川上流の大垣との間に客船や荷物船の発着場となっていた。昭和34年(1959)の伊勢湾台風以後の高潮対策工事のため、渡船場と道路の間に防波堤が築かれて旧観は著しく変化し港としての機能は全く失われた。昭和63年から平成元年にかけて、付近の整備修景工事が行われた。平成19年に周辺整備が行われ、現在の景観となった。なお、現存する常夜灯は江戸や桑名の人たちの寄進によって建立され、元は鍛冶町の東海道筋にあったが、交通の邪魔になるので、ここへ移築された。元は天保4年(1833)建立のものであったが、昭和37年に台風で倒壊したので台石は元のままであるが、上部は多度神社から移したもので、安政3年(1856)銘。



⑪ <sup>かいぞうじ</sup> 海蔵寺

<sup>ほうしやうざん</sup> 法性山と号す。曹洞宗。古くは西方村にあったともいう。寛永年間(1624~1644)に中興。宝暦治水工事の際に没した「薩摩義士の墓所」24基がある。中央の五輪塔が工事の総奉行をつとめた薩摩藩家老平田鞆負(宝暦5年=1755没)の墓である。建物は戦災で全焼。現本堂は昭和31年(1956)再建。寺宝として平田鞆負木像(昭和3年、内藤伸作)、義士を葬った際の「葬い証文」、薩摩焼焼酎徳利などがある。平田鞆負の命日である5月25日には毎年祭典供養が行われる。



⑫ <sup>きたくわなじんじや</sup> 北桑名神社

江戸時代は三崎神明社とも今一色神明社とも称し、今一色の産土神である。明治41年(1908)に式内佐乃富神社、式内中臣神社、太一丸神明社などを合祀し、現社名に改称。佐乃富・中臣神社は宝殿町にあり、壬申の乱のときに<sup>うのひめみこ</sup> 鷺野皇女(のちの持統天皇)が宝物を安置した処と伝えられる。そのため、当社前には「持統天皇御旧跡」の石碑がある。戦災にて焼失、現本殿は昭和44年(1969)再建。総門は平成24年5月に再建された。



⑬ つつみはらどうひょう じょうやとう  
堤原道標・常夜燈

堤原の西端、美濃多度街道の分岐点にある。表示石は、「右みのたどみち、左すてんしょみち」とあり、魚町尾張屋文助によって弘化4年(1847)に建立。「すてんしょ」とは鉄道の駅「ステーション」のことであり、左の文は桑名駅ができた後に彫り込まれたと思われる。

常夜燈は安政3年(1856)の建立。寄進者の名前が約400人彫り込まれ、当時の桑名の有名な商人の名前もみられ、波切屋・日野屋・日永屋・大坂屋・大泉屋・立田屋など出身地の地名を名乗ったと思われる屋号や、貝屋・魚屋・鍛冶屋・多留屋・石灰屋・米屋・楢木屋など商品名の屋号もみられる。



---

出典 志るべ石（桑名市教育委員会）  
みえ歴史街道ウォーキングマップ東海道（三重県環境生活部）